



なぜジダン選手は頭突きしたのか？

小雨の降る10月17日の夜、東京駅に隣接する丸の内トラストタワー本館の26階ホワイト&ケース法律事務所の会場にて、FITチャリティ・ラン2017支援団体懇親会に参加し、エンドオブライフ・ケア協会の理事として、名だたる金融関係の皆様の前で短いスピーチをする機会を頂きました。FITとは、Financial Industry in Tokyoの略語で、今年は59の協賛企業がありました。外資系の金融関係者も多いなか、限られた3分で、どのようなスピーチが心に残るのでしょうか。直感として、頭に浮かんだ言葉は、次の言葉でした。

なぜジダン選手は頭突きしたのか？
今の子供達はジダン選手を知らない人も多いので、次の3択から答えて頂きます。

1. 相手の選手を傷つけて良いと思っていた
 2. 相手の選手から大切な家族を侮辱されたから
 3. 相手の選手の胸に、ハエがとまっていた
- たぶん、大阪であれば3番に多くの子供達が手を上げるでしょう。そして、一言「なんでやねん…！」もちろん正解は2番です。

人はあまりにも大きな苦しみがあると、頭では大切にしないといけないとわかっているにもかかわらず、傷つけることがあります。では、どうしたら良いのでしょうか。それは、ただ命は大切だと伝えるだけではありません。たとえ、苦しくても、人を傷つけない、自らを傷つけない、頭突きしないためにはどうしたら良いかを考えた方が賢明と考えます。そんなこと、できるのでしょうか？

答えは イエス です。
たとえ命に限られる苦しみを抱えた人でも、ホスピスでの援助を通して、穏やかさを取り戻すことができるからです。それは一部の人が起こす奇跡ではなく、私たちの持つ可能性です。いのちの授業は、レジリエンス教育（折れない心を育てる教育）です。

いのちの授業を受けた子供達は、苦しんでいる友人の力になってくれることでしょうか。自分の苦しみと向き合っていくことでしょうか。もし大切なおじいさん・おばあさんが介護を必要とする苦しみを抱えたとしても、仕事と親の介護で悩み苦しむご両親に力を与えてくれることでしょうか。そんな社会が来るために、いのちの授業の教材を開発し、都市部の中学校に拡げて行くことを通して、超高齢少子多死時代の社会課題に取り組んできたいと思えます。

小澤竹俊

日本死の臨床研究会年次大会に参加しました

10月に秋田で開催された日本死の臨床研究会年次大会に、当院から5名が参加しました。事例検討やシンポジウムなどに積極的に参加し、夜は秋田の美味しいお酒をなぜかフレンドリーな“なまはげ”と一緒に飲むことができました。志のある仲間と夢を語るだけではなく、一緒に働くことができることの喜びを味わうことができました。写真は、院長が座長の企画委員会主催シンポジウムの一コマです。院長が普通の人に見えるほどキャラの濃いシンポジスト4人です。



日経ビジネス「有訓無訓」に紹介されました

2017年10月16日発行の日経ビジネス「有訓無訓」というコーナーで、“誰かの支えになろうとする人こそ、一番支えを必要としている”が紹介されました。これからの時代、日本の企業が国難と向き合う為に、40-50代のビジネスパーソンが親の介護と仕事の両立という困難と向き合わないといけません。折れない心、レジリエンス教育が大切になります。

診 療 実 績

	2006-2016年	2017年 1-6月	7月	8月	9月	2017年 計	総計
訪問回数	50,852	4,555	767	781	787	6,890	57,742
自宅永眠	1,769	104	14	20	23	161	1,930
施設永眠	218	31	5	7	3	46	264
在宅 (自宅+施設)	1,987	135	19	27	26	207	2,194
病院永眠	487	52	9	5	11	77	564